



## アライの進歩とは

ライダーが転倒し、ヘルメットに衝撃が加わった際に、その衝撃をそのまま頭に伝えず、頭を守る役目をするのが、緩衝ライナーです。その緩衝ライナーは、発泡スチロールでできているのは皆さんもご存じのことでしょう。



緩衝ライナーの硬さは、発泡体の密度で表されます。リッター当たりの重量の高いものは硬く、少ないものは柔らかくなります。しかしそれだけではありません。ヘルメットは、角度によって当たる面積が異なります。比較的面積の広い側頭部や後頭部に合わせた硬度を使うと、面積の狭い前頭部では、柔らかすぎ、前頭部に合わせた硬度では、その他の部分が硬くなりすぎるのです。そこで、ほとんどのヘルメットは、その中間位の硬度の緩衝体を使用しているのです。



ところが、アライの緩衝ライナーは、シールド開口部のヘリ近く、おでこの狭い面積でリ

ッター当たりで50g。その上部及び側頭部は38g。より面積が広がる頂頭部では34gできています。一体成型の緩衝ライナーで部位に合わせた理想の硬度を実現しているのです。これは世界中でもアライだけの技術です。



アライを除く世界中の平均的なスネル規格ヘルメットの緩衝ライナーをみると、部位に関わらずすべて同一で、リッター当たり50g前後の硬度でできているものが多い様です。それに対し、アライの緩衝ライナーの硬度は、その大部分が34~38gの柔らかい発泡体で作られています。34~38gのカタサは、指の腹で押せば、凹んでしまう柔らかさで、頭に優しいヘルメットになっています。



このように、緩衝ライナーの硬度を柔らかくするには、それを補う帽体の強度が必要となります。また逆に硬い緩衝体を使用すること

は帽体の弱さを補い、規格に受かるための妥協とも言えます。規格に受からないからです。アライは、より頑丈な帽体を使用することにより、平均的なスネル規格ヘルメットよりも30%も柔らかい緩衝体を使用しているのです。



そして、技術の進歩は、目に見えない部分で進んでいます。10年前初めて登場したラバイドの帽体重量は、約1キロ。緩衝体の硬度は、42gでした。現在発売しているラバイドBの帽体重量は約780グラム、緩衝体の硬度は、34~38gです。もちろん、衝撃吸収性能は、ラバイドBの方が遙かに優れています。しかも、帽体重量単体で200グラム以上軽く、緩衝体の硬度で約15%も柔らかくなっているのです。



ヘルメットの進歩は、空力、シールドシステムや、内装など目に見える部分は、もちろんですが、アライは、目に見えない安全性に常に目を向け、大きく進歩させているのです。